

助成番号：436

第8回国際小麦遺伝学シンポジウムに参加、 発表ならびに共同研究者との研究打合せ

三 浦 秀 穂

畜産環境科学科飼料作物科学講座

1. 目 的

第8回国際小麦遺伝学シンポジウムに参加、発表ならびに共同研究者との研究打合せ

2. 期 間

1993年7月17日～7月31日

3. 場 所

中華人民共和国・北京

4. 内 容

このシンポジウムはコムギの遺伝、育種学に関連する分野を包括している。コムギ遺伝学の双壁である米国 E. R. Sears 博士と本講座とも縁のある木原 均博士を中心に1950年代に国際遺伝学会議から独立した形で組織され、5年に1度の割合で開催されている。前回は1988年に英国ケンブリッジで開催され、その折りの総会で今回の北京開催が圧倒的多数の支持で決まったが、1989年の天安門事件の影響で一時は変更が検討されたようである。そのため、運営にあたった中国科学アカデミー遺伝学研究所の関係者は喜色満面であった。

7月中旬の北京は夏の盛りであったが、例年に比べると冷夏とのことで思ったより凌ぎ安かった。空が高く感じられ、スモッグか廣砂か原因はわからなかったが、期間中十勝のようなスキッとした青空を望めなかった。

シンポジウム会場は、北京市内の北に位置する北京国際会議センターで、海外からの参加者はその隣のホテルに宿をとり、連日缶詰の状態で開催に臨んだ。ただし、ランチタイムが2時間あったことやポスター発表に充分時間が当てられていたので全体として窮屈な感じはしなかった。招待講演も含めて300題ほどの発表があり、進化、細胞遺伝、分子遺伝・バイオテクノロジー、遺伝子マッピング、病理、環境ストレス耐性、育種の7つのセクションがプログラムされていた。著者の印象で最も反響を呼んだと思われるのは、英国ケンブリッジ研究所の Dr. Gale のグループによる遺伝子マッピングの発表で、コムギ21対すべての染色体について詳細な RFLP 分析が示された。この発表はある程度事前に予測されていたが、各染色体に100以上の RFLP が網羅された説得力のあるス

ライドはさすがにショックであった。さらには、彼らがイネ、トウモロコシ、オオムギを含めての進化にまで言及したことは、関係分野の研究者にとっては追い打ちを掛けられた上に、引導を渡された気分になったのは私一人でなかったようである。その一方で、旧ユーゴや東欧の一部の研究者の中に申し込みしながら参加できなかった人があり、わが身の幸せを感じた。

会議の期間中、以前滞在し現在も共同研究を実施しているケンブリッジ研究所の Dr. Snape や Worland と旧交を温めるとともに情報交換を行った。彼らは何度か中国を訪れていたがさすがに食事には困っていたようである。そういう私もはじめの頃は外で夕食を楽しんでいたが、後半はひどい下痢に悩まされ、くだものとお粥が主食となった。最終の日曜日にエクスカーションで万里の長城を訪れたときは何とか薬でごまかしたが、帰国時は会議での学問的ショックと体力消耗で帯広までの道のりが遠く感じられた。それに対し、欧米や日本からの著名な研究者の多くが会議終了後、チベットやシルクロードまで足をのばすほどに元気であった。研究と体力は相関することを学んだ次第である。